

イレッサ効果早期判定

阪大グループPET使い3日で

肺がん治療薬デファイチ ニブ（商品名イレッサ） の効果を、患者ごとに判 定する手法を大阪大学の グループが開発した。投 与開始から3日間ががん 細胞の活動状況がどう変 わるかを陽電子放射断層 撮影装置（PET）で調 べ、判定に使う。効く可 能性が低いのに投与を続 ける無駄や副作用を防げ る。5年後をめどに、全 国的な普及を目指す。	イレッサを巡っては副 作用で死亡したなどし て遺族や患者がメーカ ーに損害賠償を求める訴 訟を起こし、7日に東京地 裁と大阪地裁が和解勧告 したばかり。がん細胞に 特定の遺伝子変異がある 患者に効きやすいとされ るが例外もあり、効果を 正確に把握する方法が求 められていた。	阪大の立花功講師、高 橋良医員、畑澤順教授ら は薬が効きがんが縮小す る前に、がん細胞に何ら かの変化が起こると考え た。患者20人を対象にP ETで患者のがん細胞の 活動度をあらかじめ調べ ておき、イレッサ投与3 日目に再び検査して活動 レベルの変化を見た。 がん細胞が検査用薬剤 を取り込む能力が低下し
---	--	---

ていたケースでは、イレッサを引き続き1カ月間投与するとがんは縮小した。逆に取り込み量が変

わらないとがんの増殖は止まらなかった。3日間のデータで効果が見込めないと判断した場合は直ちに投与をやめれば、重い副作用の間質性肺炎も起きにくいとみている。